保育者及び小学校教員養成課程在籍者の観察力の向上に関する実践
―りんご「ふじ」の描画における発見の言語化の効果（2）―

The Practice on method of improvement observation skills of preschool teacher training and primaryschool teacher training students
―Linguistic Effect of Discovery in Drawing of Apple Fuji（2）―

中　尾　泰　斗
Taito Nakao

1－1.はじめに

本研究で対象とする保育者養成及び初等教員養成課程在籍者（以下、学生と記す）は概ね18歳から20歳前後である。この年齢の描画の発達段階は、「完成期」(14歳～18歳ごろ）以降にあたる。

その傾向は、対象が何であるかを示すことを特徴とする知的リアリズムから、物を見えたとおりに描く視覚的リアリズムと呼ばれる段階にある[1]。

しかし、専門的な描画の訓練を経ない場合には、その段階への発達が出題された課題の文脈や意図の理解、運筆能力の不足によって妨げられる。このため、完成期の前段階にあたる図式期的様相を呈する場合が多い（進藤2013[2]）。それを示すように、本実践においても殆どの学生が想像でりんごを描画する際に、図1のように色や形を記号化した描画が多くあったことは前稿でも紹介した。

一方で、学生には卒業後に保育士や教員として現場で耐えうる描画能力が要求される（丹2008[3]）。このため、描画の向上による対象者の年齢に応じった描画の発達段階への移行は看過できない課題であるといえる。

1－2.描画力の向上に必要な要素

描画力の向上には「造形性の基本的な体験」と「するどい目を養う」ための修練が必要となる（中崎1971[4]）。つまり、観察を行う意識や姿勢とその成果を現出する技術を習得していくことが求められる。

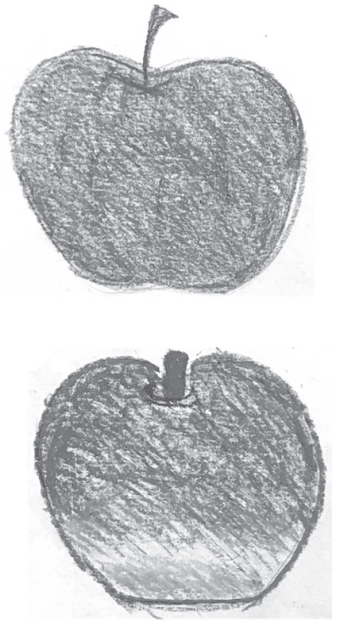

図1　学生に多く見られた描画の傾向

その芸術活動の一連の流れは①外界の知覚・認識、②認識と行動の対応づけ（認識の結果に対する最適な行動の選択）、③行動を繰り返すことで達成される（斎藤2007[5]）。つまり、描画の能力を身に着けるためには、観察への積極的な姿勢が前提となる。

上記の二項の獲得は、幼稚園教育要領における表現のねらいに示される「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。[6]」保育を構成する力へと還元されよう。しかしそれは、多くの先学が指摘するよ

うに、日常で描画活動に携わらない学生にとって容易でない。

２－１．研究の目的

では、このような現状の中で、描画活動の第一歩となる観察力に関する学生の実際や、その向上はどのような方法が検討できるのであろうか。

この点に端を発して筆者は、拙稿（中尾2018[7]）にてりんごの描画活動を通して得られた成果から検討してきた。本稿では、前稿に引き続きその結果の報告と考察を行う。

２－２．研究の方法

本研究は、19歳から20歳の女子大学生114人を対象に以下の手順でりんご「ふじ」の絵画制作を行った。

①りんごの品種「ふじ」を描くように出題する。
②学生は自由に描画する。その際に使用した色名を明記する。
③演習時点で学生が把握しているりんごの特徴を文字化する。
④実物のりんごに触れ、上面や側面等の多角的な観察により発見した事柄を自由に記述する。
⑤④での記述を反映した描画を行う。
⑥両者の相違点を振り返る。

３．結果

３－１．使用した色数別にみる観察による色彩の認識

本稿の対象者が研究の方法②で用いた色名の詳細は前稿で示している。そしてその後、研究の方法④にて実際のりんごの観察から発見した赤以外の色彩とその内訳は表１から表９となった。

表１では、全体を通して、黄色や黄緑といったりんごの固有色に関わる色が主に見出されていたと分かる。しかし、少数ながらピンクやクリーム等の中間色や青、青緑等の寒色の存在も認識された。また、「橙のような赤」といった色相上の微妙な色調を認識できたという結果が出た。

その中で注目できる変化は、使用数が４色であった学生において原色の他に中間色や混色、濃い、薄いといった差を多く見出していることや、使用数が５色の学生が、黒や茶色といった暗色を発見したという点が挙げられよう。

そして表２から表９からは、観察によって発見した

表１．使用した色数別にみる観察により発見した色名

発見した色数	発見した色			
	使用した色数が４色の学生	使用した色数が５色の学生	使用した色数が６色の学生	使用した色数が７色の学生
3	黄、黄緑、緑			
4	黄、黄緑、緑、濃い赤、白			
5	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、緑、濃い赤、薄い黄緑	黄、茶、黄緑、橙、白、赤黒、緑、クリーム、黒		
6	黄、茶、黄緑、橙、白、黒、緑、黄土、赤茶、ピンク	黄、茶、黄緑、橙、白、緑、赤茶、渋い緑	黄、黄緑、橙、白、黒、ピンク、濃い赤	
7	黄、茶、黄緑、橙、白、ピンク、緑、肌色、黄土、黒、青黄色、青、薄いピンク		黄、茶、黄緑、橙、白、黒	
9	緑、ピンク、青緑、黄、黄緑、橙、白、茶、濃い赤、橙のような赤			黄、白、黄緑、ピンク、黒、緑、赤っぽいピンク、橙のような赤
10	クリーム、黄、黄緑、白、ピンク、黄土、青黒、橙、緑			
11		茶、黄、橙、黄緑、こげ茶、白、クリーム、緑、ピンク、グレー		

色数が、研究の方法②にて想像で描画した際と同数か、増加した傾向にあった学生が多かった。

（1）使用数４色の学生

表２. 発見した色数の分布

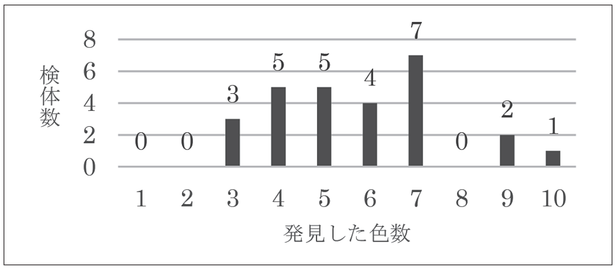

表３. 色名とその内訳

赤	27	白	15	青	1
茶	10	ピンク	2	赤茶	1
黄	24	薄い黄緑	1	クリーム	1
黄緑	23	青緑	1	橙のような赤	1
緑	13	薄いピンク	1	肌色	1
黄土	4	黒	4	青黒	1
橙	15	青黄色	1	濃い赤	5

（2）使用数５色の学生

表４. 発見した色数の分布

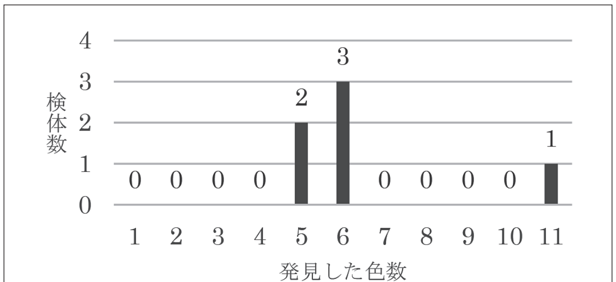

表５. 色名とその内訳

赤	6	黒	1	こげ茶	1
茶	3	白	4	赤黒	1
黄	6	ピンク	1	渋い緑	1
黄緑	5	グレー	1	クリーム	1
緑	3	赤茶	1	橙	3

（3）使用数６色の学生

表６. 発見した色数の分布

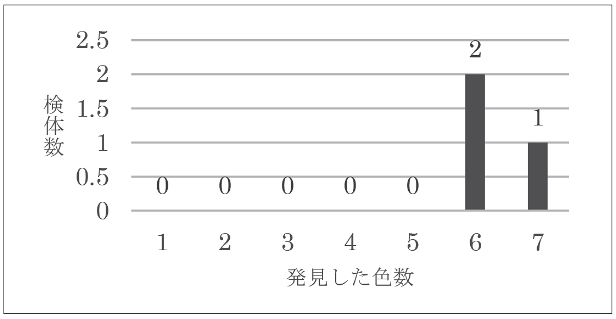

表７. 色名とその内訳

赤	3	白	3	濃い赤	1
茶	1	ピンク	1	黒	2
黄	3	橙	2	黄緑	3

（4）使用数７色の学生

表８. 発見した色数の分布

表９. 色名とその内訳

赤	1	白	1	緑	1
緑	1	ピンク	1	橙のような赤	1
黒	1	黄緑	1	赤っぽいピンク	1

３－２. かたち、質感への気づき

学生が色彩以外に注目した事項には、表10に示したように形や質感といった林檎の造形的な要素が主だっていた。

そこでは、観察の作業以前に認識していた林檎への丸や縦長といった印象に対して、左右非対称であることや輪郭のいびつさ、下辺が短い台形への気づきがあった。つまり、観察によってこれまで認識していた形態に関する情報がより詳細に具体化していったとわかる。

また質感においては、つやの有無やくすみ、粉吹き、

斑点、色彩の用いられ方が線状であったことに気付いた回答があった。次項の結果を踏まえると、これらからは、学生が描画に向かうために必要な情報を観察によって獲得しようとしていた姿勢が窺えよう。

3－3．描画の変化に対する認識と自覚

ここまでの成果を反映させた制作を経て、学生は表11の変化を感じ取っていた。本研究の結果からは、塗り方、すなわち描法に関する変化を見出していた学生が多くみられた。

その中で、「少しずつ塗った」や「点を打った」「塗り方が放射状になった」「輪郭から塗らなくなった」との回答は、ベタ塗に近かった実践冒頭の描画とは傾向を異としている。また、単色から多色を用いた複雑な色味への展開や丸型であった林檎の形態が、左右非対称や傾きを持ったものへと変化したことは、観察の結果を描画に還元しようとした姿勢の表れであったと捉えられよう。

一方で、自身の理想とのかい離を感じた意見もあった。しかし、その実感は描法の工夫によって林檎の丸みを表現しようとした点や、ハイライトへの意識といった回答から、実際の林檎を立体的に捉えて再現しようとしたことに起因したものと考えられる。

表10．被験者のりんごの形と質感に対するこれまでの認識と観察により発見した内容

	使用数４色	使用数５色	使用数６色	使用数７色
リンゴに対する これまでの認識	丸い 芯のところはへこんでいる 縦に大きい いびつ 上下で丸さが違う 不ぞろい	四角のような丸 丸に近い 凸凹がある	丸っぽい 角が無い 細長い	縦に長がい 横に長い 丸い

		使用色数別での観察により発見した事項			
観察の視点		使用数４色	使用数５色	使用数６色	使用数７色
かたち	上面からの発見	へこみがある きれいな丸ではない 不ぞろい 三角に近い へこんだ部分が三角に見える	丸い いびつな丸 楕円 丸に近いが角がある 中心にヘタがある	枝が真ん中にある	中心にヘタがある
	側面からの発見	球ではない 下に連れて小さくなる 台形 縦長 同じような部分が無い 丸じゃない 上の辺と縦の辺が平ら 丸のような四角	左右非対称 上が広く下が短い台形 凸凹 四角寄りの丸	下と上が平ら きれいな円ではない 左右非対称 凸凹	楕円
質感		赤や黄の線が放射状に広がっている しわとしみ、傷がある 斑点が無造作にある つやがある 粉を吹いているように見える くすんでいる 場所によって色むらがある 表面が凸凹している	つやがある 縦線が入っている 傷がある 斑点がある	大きさの違う斑点や線がある つやが無い	

表11. 観察画の制作後に認識した描画の変化

	認識した描画の変化			
	使用数４色	使用数５色	使用数６色	使用数７色
色彩	色が濃くなった 色が増えた 黄や黄緑、緑、茶、黄土を使った 濃淡に変化をつけた 上が濃く、下が黄色になった 色が混ざるようにした 赤色が減った ピンクだったのが赤と茶になった 多色を少しずつ塗った まだらに黄が入った	同じ色でも使い方が変わった 黄色を多く使った 全体の色が濃くなった 色を重ねた 黄緑等の赤以外の色が入った 赤のグラデーションが奇麗になった 色数が増えた	緑も入れた 色を濃くした 点が白から緑になった 黄色がベースになった	中心をより赤くした 黄、茶、緑で点を打った 縦に黒い線を入れた 上と下に緑、黄緑を入れてグラデーションをつくった 赤一色から、茶や濃い赤が入った
かたち	左右対称だったのが、左右の丸さに差が出た 縦長になった 上から見た時５角形になった かたちがいびつになった 少し傾いた ヘタを描かなくてもリンゴとわかるようになった 塗り方を変えたので、丸みが感じられるようになった 凸凹やゆがみがついた 立体的になった 横から見た時に四角に近くなった 輪郭にこだわった 細くなった	筋や点を描いた 観念的な形ではなくなった 長丸になった かたちがかわった 立体的になった	左右非対称になった かたちが細くなった へたが無くなった かたちがいびつになった 斑点や線を描いた	楕円にした
質感	光の位置がへたの周りになった		つや無しになった 黒ずみや光を描いた	
その他	おいしそうではない 塗り方が放射状になった 見た目がリアルになった 葉っぱはなくなった 林檎らしくない 上から見たようになった 理想のイメージと違う 輪郭から塗らなくなった 傷を描いた 自分が想像する林檎とは異なるが、本物に似るようになった	視点が変わった 実物に近づいた くぼみの付近がリアルになった 自分のイメージとは違った		

４. 考察

４－１. 造形的な思考の形成

本稿で対象となっている学生は、冒頭の実践②にて色数を４色から７色使用した。このことから、被験者全体の中では色彩を多く用いる能力を見せ、製作に積極的であった学生と分類できよう。

そしてその対象者における、実践の結果からは前稿の結果と同様に、微妙な色合いや輪郭を認識する能力が見られた。それとともに、前稿の対象者に比べて、より描画や造形を成立させていくための観察とそれによって得られた情報の反映があった。

つまり学習の初期において、色彩を多く用いる能力を備えている学生が観察の姿勢を形成することは、描画においてより造形的な思考と行動が促される可能性があったことが示唆される。

４－２.色彩

色彩に関する観察の成果は、実践の結果に示したように原色の他に中間色や寒色、または色相が微妙な位置にある色味が見出された。そして、本実践におけるその分布は、多くの学生が実践の方法②での描画と同等か、それよりも多く色彩を認識した。

このことからは、学生がこれまで林檎に抱いていた色彩と、実際に描く対象として触れた際に感じた色味の数の違いが表れたと捉えられる。その際に、中間色への認識が多くみられることは注目できる。すなわち、例えば「林檎の色は赤」といった固定概念が、観察を通して省みられ、緩和していった表れといえよう。

一方で今回の実践では、観察で発見した色彩が、以前よりも少なくなったという結果も少数見られた。この要因は定かではないが、実践の方法②で使用した色の選定が無作為であったことが推察される。しかし、その後の観察よって実際に発見できた色が赤、黄色、黄緑、緑といった固有色であったため、本実践で行った二通りの描画の中での使用色の関係が反転したものであろう。

４－３.形態

観察眼が養われていない状態における形態への見方は、各個人で結果が左右する。本実践においても、林檎の外郭が四角や三角、台形といったように多様な形に認識された。

その中でも学生は目の前に置かれた林檎固有の形態の不均衡さや、直線、曲線を見出している。このことから、観察の作業がそれまでの認識である単純な丸型といった概念から展開していくための足掛かりとなったと示唆される。

そしてそれらは、実践の方法②で使用した色数の多少に関わらず同様の結果を残している。つまり、本稿の対象者においては、描画前の観察がこれから自分が描く林檎の特徴を理解していくために有効な作業であったといえよう。

４－４.描画への還元における課題と成果

ここまでに示した観察の成果を実際の描画へ還元した結果においては、図１の制作者による描画が図２のように変化した。この図からは、本実践を通して学生に造形的な観察の積極性が芽生えていたとしても、実際の達成度において再現性が獲得されたとは言い難いとわかる。

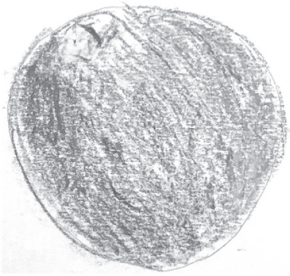

図２　観察を反映した図１の制作者の描画

しかしながら、描画の修練が一回の実践を以って成らないことは言うまでもない。加えて冒頭にも示したように、本研究で対象とした学生に求められる学習は、今後の保育や教育の現場で表現において自立した活動を構成するための第一歩として必要な、「感じる姿勢を身に着ける」ことである。

そのような点を踏まえると、本稿の結果からは、観察の成果という観点においてそれ以前よりも多くの色彩を認識し、形態の固有性や規則性を見出していた。さらに、それを自分なりに平面上に現出していく際に描写の方法を工夫したという点は、「自分が実際に触れて、観察し、描画していた林檎」の外郭とその内側にある色味や量を感じ取って表現しようとした表れと認識できる。このことは、学生の描画に対する姿勢が知的リアリズムから、視覚的リアリズムへと展開できる兆しを見せたと捉えられよう。

５.今後の課題

前稿と本稿を通して、今回の実践における結果を子

細に報告してきた。今後はそれらを統合し、観察と描画の変化の関係を明確にしていく。そして、その観察画の成果が、制作者自身である学生にどのように受容されているのか調査し、描画の発達における理想と実際の関係性について検討していく。

駐

1　進藤将敏「幼児における描画発達研究の外観と展望」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第62集、2013年、218頁
2　進藤将敏「幼児における描画発達研究の外観と展望」218頁219-221頁
3　丹進「真似るから学へ―描画能力を高める一試案―」『園田学園女子大学論文集』第42号、2008年、217頁
4　中﨑修男「幼児美術教育の基本的問題の考察」『駒沢女子短期大学研究紀要』第５巻、1971年、86頁
5　斎藤洋志「デッサン学習者の視線と動作の分析と学習支援環境への応用」第21回人工知能学会全国大会、2007年、1頁
6　『幼稚園教育要領〈平成29年告示〉』フレーベル館、2017年、20頁
7　中尾泰斗「保育者及び小学校教員養成課程在籍者における観察力の向上に関する実践―りんご「ふじ」の描画における発見の言語化の効果（１）―」『福岡女学院大学紀要人間関係学部編（第19号）』2018年

図版典拠

図１－２筆者撮影
表１－11筆者作成